

## 第 20 回 陰陽五行と重陽の節句と菊の花の宴

### 1 十二支十干ですべてを表現するという風習

日本には古くから陰陽五行という考え方があります。これは、森羅万象すべての万物が、「木」「火」「土」「金」「水」の 5 つの要素からできていて、その 5 つの要素のすべてに「陰」と「陽」があるという考え方です。この 5 個の要素に陰陽の 2 倍で、10 種類の分け方が可能ですね。このことを「十干（じゅっかん）」と言います。

日本の暦は、この「十干」と「十二支」によって形づけられています。そのために「十二支十干」あるいは、その数字の部分抜いて簡単に「干支」という言い方をします。

干支はすでに商（殷）代に現れているとされています。殷墟出土の亀甲獣骨、要するに亀の甲羅や動物の骨を焼いて占いをするのですが、その時に、干支を書いて日付を表したとされる文字がたくさん見つかっています。

太陰暦は月の満ち欠けから暦を作るやり方ですが、これはだいたい 28 日から 29 日の周期です。その周期の 2 週分が十二支十干であらわされています。そして 1 年を十二支から 12 か月に設定し、また、その 12 の倍数で 1 日を 24 時間に分割しています。

甲骨文には「卜旬（ぼくじゅん）」というものがあります。これは、ある特定の日（<sup>みづのと</sup>癸の日）から向こう 10 日間、要するに十干の一巡する間の吉凶を占ったものなのです。古い中国の考え方では、十干を 3 回繰り返すと 1 か月（30 日）になるという発想で、十干と十二支を組み合わせると、2 か月（60 日）周期で日付を記録することになります。その繰り返しを行うことで、占いを周期にし、その周期を考えるようにしたのです。

ある日を甲子とすると、第 2 日が乙丑、第 3 日が丙寅というように進んで第 60 日の癸亥へと進み、第 61 日に至ると再び甲子に還って日を記述していったのです。これは、中国でもまた日本でも、3000 年以上経った今に至るまで、断絶することなく用いられている日数の記載方法になっているのです。この記載方法が続いているので、東アジア・中央アジアそして日本の古い文献はすべてこの記載方法で年月日が記載されているので、さかのぼって何年のことなのかわかることができます。

また、万物がこの考え方になっています。何しろ暦がこの内容でできているのですから、占いも、また、物事の組成もすべてがこの考え方から出来上がっているのです。時刻や角度もこの考え方からできています。また、1 つ 1 つに意味がありますので、干支によって俗説が様々についてきます。

例えば、日本では60（数え年で61歳）で「還暦」という習慣があります。これは数え年の61歳は、生まれた年の干支に戻るので、「暦が還った」という意味で「還暦」と言います。昔は、数え年ですからすべての人が正月に年を取るとしていたのですが、還暦の正月には、公私ともに正式に隠居して長寿の祝いをしたのです。干支が元に戻ることから、生まれた年に戻ることでもう1度赤ちゃんに戻って「生まれ直す」という意味合いをこめているのです。赤ちゃんからやり直せば、また長く生きることができるということで、親族などが赤い頭巾やちゃんちゃんこを贈り、赤ちゃんのような外見にして死期を遠ざけるという意味があったのですね。

このほかにも、俗説では「庚申講」というものがあります。中国道教にある古い言い伝えによれば、人間の頭と腹と足には彭侯子【上戸】・彭常子【中戸】・命児子【下戸】の三尸（さんし）の虫がいるとされています。三尸の虫は、いつもその人の悪事を監視して見えています。そして三尸の虫は庚申の日の夜、人が寝ている間に、天に登って天帝に日頃の悪い行いを報告し、罪状によっては寿命が縮められると言い伝えられていたのです。そこで、三尸の虫が天に登れないようにするため、この日は村人が集まって神々を祀り、寝ずに酒盛りなどをして夜を明かしました。これが「庚申講」です。これを3年、60日に1度なので18回繰り返すと、庚申の塚や塔を作って、大願成就を祈ったのです。今でも神社などに行くと「庚申塚」というものがあります。

このように、干支による年月日の表現や、方角の表記は、非常に日本の慣習や風習に根付いています。このほかにも、探してみると、様々なことがあるんです。

## 2 数字の中の陰陽と陽の数字の最も大きな「9」

実は数字にも「陰」の数と「陽」の数があります。

陰陽の考え方も古代中国の時代から存在する考え方で、すべての物事における2つの属性を考えるものなんですね。そして、「陰」と「陽」は常に同じものの表裏を表しているものであり、同時に、その表裏に関して必ずしも固定したものではないのです。1つのものが「動く」ことは「陽」であるのに対して、同じものが「止まる」と「静」要するに「陰」になります。古く、易経の考え方では、「男性を陽」「女性を陰」と考えたことから「陰」と「陽」が決められたとも言われているんです。そもそも「陰陽」といながら「陽陰」といわないのは、物事の理として、男性も女性も、必ず女性から生まれるので「陰陽」と「陰」を先に呼ぶ習慣になっているのです。

さて、「天・日・父・男・親・仁・上・前・明・往・昼・尊・貴・福」を「陽」とし、「地・月・母・女・子・義・下・後・暗・来・夜・卑・賤・禍」が「陰」となります。この概念は必ず固定するものではありません。日が沈めば月が出ますし、往路があれば復路要するに「来る」ということが必ずあるものです。また、前や尊ということが陽であるとしても、それは「後」や「卑」ものに対して「陽」であるだけで、より前にあるもの、より尊いも

のから見れば、やはりいずれも「陰」ということになってしまいます。また、女性は、「女」としては「陰」ですが、子供を産んで「親」となると「陽」になります。ですから 1 つの現象が「陰」と「陽」に分かれているのであって、必ずしも固定した概念ではないということになるのです。ある意味で「陰」と「陽」は常に変化していますし、また相対的な形によって陰陽ができていけると言えます。ですから陰陽の考え方は必ずしも固定的なものはありません。

その概念の中で、数字は「奇数が陽」の数で、「偶数が陰」の数になります。男性が「陽」であり女性が「陰」であることに由来しています。

古事記の初めの部分、「国生みの神話」においてイザナギノミコトとイザナミノミコトはどうやって国を生んだらよいかわからない。その場面の記述にこのようなものがあります（現代語訳より）。

イザナギノミコトが、イザナミノミコトに「あなたのからだは、どんなふうにできていますか」と、お尋ねになりましたので、「わたくしのからだは、できあがって、でききらない所が 1 か所あります」とお答えになりました。そこでイザナギノミコトの仰せられるには「わたしのからだは、できあがって、でき過ぎた所が 1 か所ある。だからわたしのでき過ぎた所をあなたのでききらない所にさして國を生み出そうと思うがどうだろう」と仰せられたので、イザナミノミコトが「それがいいでしょう」とお答えになりました。

（以上抜粋）

この会話にあるように、男性のイザナギノミコトの身体は「で過ぎたところが 1 か所ある」ということであり、女性のイザナミノミコトの身体は「でききらない所が 1 か所あります」というようになっています。

まさに、このことが陰と陽を表すもので、「で過ぎたものがあって」2 つに割って割り切れないものが、男性に近い形であることから「陽」であり、「でききらないところが 1 か所あって」割り切れるものが女性に近い形であることから「陰」ということになります。ですから「奇数が陽」であり「偶数が陰」なのです。

この考え方からすると、陰の最も大きなものは「8」であり、陽の最も大きな数字は「9」ということになります。

ですから今月、9月は、陽の月で最も大きな月となるのです。

そして9月9日は「陽の最も大きな数である9が重なる日」として、「重陽の節句」と言います。まさに「9」と「9」が重なる、陰陽の思想からすると最も「陽」、要するに「動き」が大きな日となるのです。

### 3 五節句の中の重陽の節句、その意味合いの変化

では、重陽の節句とはどのようなものでしょうか。

古くは「陽」が重なりすぎるのは、転じて「大きな陰を招く」として、「陰を払うお祭り」

がされたのです。まさに、陰陽の考え方から、常に陰と陽は動いており、陽が来れば陰に転じるという考え方から、最も陽が強い時は、反動で最も大きな陰に転じてしまうという思想があったことからきている思想です。

まさに、最も上り詰めてしまっただけは、あとは降りるしかないのですから、「重陽」はまさに、その転換点ということになります。少々の陰が来ることは悪くありませんが、急に陽から最も陰が重なるような状態になってしまえば、それは大変です。ですから、そのような激しい陰の来訪を払うという意味で、宮中で儀式が行われたのです。

しかし、日本が徐々に中国風から国風文化になり、陰陽に関しても、日本の独自の思想が入るようになってくると、「重陽の節句」は「陰払い」ではなく「重陽を祝う」という風習に変わってきました。やはり、「陽」というと人は明るいイメージを持ててしまいます。そのために、「陽の重なった日に陰払い」という風習は、今一つなじまないんですね。ですから、どうしても重陽の節句は、徐々に「祝う」ことになります。

日本の節句は「五節句」といって5つの節句があります。そもそも、「節句」とは季節や時の節目をお祝いするという意味で、日本には四季があるので、4回、そして、もう1つは年が改まったということで、1回、合わせて5回の節句があるのです。

五節句の詳しいお話は、それぞれの時に行いますが、1月7日が「七草」要するに、年が改まった時の節句ですね。これは、昔は数え年で1月7日に人は皆年を取るとされてきましたから、その年が明けたときに、その年の1年間を無事に健康で過ごせますようにという節句です。この日は「人の日の節句」とされ、人が人を大事にする日とされています。次の節句が3月3日、これは冬から春になる節句ですね。正式には「上巳の節句」と言いますが、この時期の花にたとえて「桃の節句」と言った方がなじみがあります。説明するまでもなく女の子の日で、「ひな祭り」として親しまれていますね。次が5月5日でちょうど稲を植えるころの節句です。「端午の節句」と言われたり、この時期の花にたとえて「菖蒲の節句」などと言われます。今では子供の日ですが、昔は男の子のお祭りですね。そして7月7日、「七夕の節句」、いわゆる「七夕」です。これを過ぎると秋の兆しが来る頃という節句でもありますね。今でも旧暦8月初旬に七夕祭りを挙げる場所は少なくありませんね。

そして、9月9日が「重陽の節句」です。このころは「収穫」と「陽の数」とそしてこのころに、菊の花が咲くということから「菊の節句」ということもありますね。重陽の節句では、ちょうど収穫、そして、暦の上では少し早いですが、収穫が終わったということから、そろそろ冬支度になるという意味の節句でもあります。そして、これから長く厳しい冬に向かって、身体の邪気を払い、健康と長寿を祈る、そんなお祭りになっているのです。

五節句は、見ていただければ分かるように、1月7日を除けば、全て奇数月、要するに陽の数の月が重なった時に行われます。そして、稲の生育とともに、節句が分けられています。ですから11月は節句がないんですね。

日本の節句の心やお祭りは、植物の生育や季節と非常によく結びついていますので、そ

の意味でも、稲を刈り取る収穫の時期、そして、陽の数が重なる時期というのは非常に重視されていたんです。

最近では、重陽の節句をあまり重視しなくなりました。農業があまり盛んでなかったり、あるいは、植物に季節感がなくなったということもあります。また、都会の暮らしに慣れてきてしまい、9月9日が、ちょうど学校の2学期が始まりたてで、なかなか時間が取れないなどもあります。でも、実は非常に重要な節句なのです。

#### 4 重陽の節句は「菊の節句」

重陽の節句のもっとも古い記録は、天武天皇の時代 685 年の宮中の記録の中に、重陽の節句が行われたことが書かれています。しかし、その天武天皇が崩御するのも 9 月 9 日であったために、重陽の節句はしばらく国民の忌日として、行われなかったとされています。次に重陽の節句が記録に出てくるのが大同 2 年、平城天皇の御代で、その時には「菊花の宴」として書かれています。重陽の節句が宮中で定着するのは、そのような意味で平安時代になってからというように言われています。

そして、重陽の節句のもう 1 つの主役が「菊」です。平城天皇の記録にも「菊花の宴」とあるように、重陽の節句というよりはやはり菊の花の印象が強いこと、そして平安貴族の風流心が「重陽」という言葉よりも「菊花」という言葉を好んだのではないのでしょうか。

実は、「菊」というのは、中国から日本にわたってきた時には「薬」として伝来しました。昔、お茶も薬として伝来しました。それが、お寺で供されるようになり、そのお寺の習慣がいつのまにか武士、そして庶民の文化に広まっていったんです。菊の花ももともとは薬としての伝来だったんです。古代中国では菊は「翁草 [おきなくさ]」「千代見草 [ちよみくさ]」「齡草 [よわいくさ]」と言われ、邪気を祓い長生きする効能があると信じられていました。

日本では、重陽の節句の「陰払い」の中において、「邪気を払い長生きをする」という意味で、その効果のある菊の花を使ったお祭りを行いました。

まずは 9 月 8 日、菊に綿をかぶせ、9 日に露で湿ったその綿で体を拭いて長寿を祈っていました。「菊真綿」「菊着綿」といわれるこの風習は『枕草子』8 段では、「九月九日は暁がたより雨少し降りて、菊の露もこちたく、覆ひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされて、つとめては止みにたれど、なほ曇りて、ややもせば降り落ちぬべく見えたるもをかし。」と書かれています。このほかにも「紫式部日記」や「伊勢集」などにも書かれています。多く書かれているということは、それだけ宮中の中で広く知れ渡った行事であったということが言えます。

このほかにも「菊酒」を飲み交わし、茱萸(しゅゆ=ぐみの実のこと)を掛けて悪気を祓う菊花の宴が催されるようになりました。「菊酒」は、2 つの作り方があるとされています。1 年前にとれた菊の花を塩漬けにして、その菊の花びらを酒の中に入れて一緒にお酒を造る

というものと、通常のお酒に菊の花びらを浮かべて飲むというものです。両方とも「菊酒」と言われているものですが、現在では手軽な後者の方が菊酒としては一般的であるとされています。しかし、前者、要するに花びらを塩漬けにするのは、桜の花びらの酒など、ほかの花で作られているものを見ますので、当然に菊の花でも行われていたのではないかとされています。

もう 1 つ行われたのが「菊雛」です。これから冬に向けて、寒さに負けて病になりそうなので、菊で人形を覆い、邪気を払い悪鬼を退散させるというものです。現在では、これと、菊の花の鑑賞が合わさって「菊人形」という文化で残っています。今でも「菊人形大会」などがあり、二本松市などのお祭りは有名ですが、もともとは、邪気を払うお祭りの 1 つだったんです。

これに対して庶民はどうやってお祝いしていたのでしょうか。菊の花は、薬ということですから、当然に高価なものでした。手に入るものではありません。そこで、庶民、特に農民の間では秋の田畑の収穫が行われる時期に粟ご飯などで節句を祝いましたので、「粟の節句」と呼ばれることもあります。重陽の時期に「粟ご飯」「粟粥」などを食べるのは、米とは別に、生命力強く田畑に生える粟を、自分たちの収穫と、そして、強く生きるという、健康と長寿を祝う内容として、庶民の間では祝われてきたんです。

植物は貴族と庶民で違って、そのお祝いを行う心ということでは、変わらない、そんな「重陽の節句」の姿が目に見えますね。

## 5 陰陽五行と菊

では、なぜ「菊」がそんなに大きな役割をするようになったのでしょうか。もちろん、医学的な根拠もあるのですが、実は、「菊」の花を珍重するのは、冒頭にもあげた「陰陽五行」の考え方が大きく重なります。

陰陽五行では、色も五行で色分けされています。

「木・東」が「青」ですから守り神が「青龍」

「火・南」が「赤」ですから守り神が「朱雀」

「金・西」が「白」ですから守り神が「白虎」

「水・北」が「黒」ですから守り神は「玄武」になります。

そして、真ん中が「土」で「黄色」になります。

陰陽五行の思想では、その黄色、要するに土の上を司るのが「天皇」とされています。ですから中国の皇帝も日本の天皇も、その衣服の色は黄色というようになっています。そして黄色のものは「めでたい」とされていたのです。

菊の花は、その「めでたい土の色」の花びらが幾重にも重なっています。これほどめでたいことはありません。これは「幸せが重なる」「健康が重なる」「子孫が重なる」というような形になります。

陰陽五行の中で、「菊」というよりは「収穫の時期に黄色の花びらが幾重にも重なっためでたい花」を体内に入れたり、それで飾ることは、そこが守られているということになりますし、また非常に高貴であるとされたのです。

## 6 菊の花と菊花紋章

菊の花と宮中という、どうしても触れなければならないのは「菊花紋章」要するに、「皇室の紋が菊の花である」ということです。

菊の花は、実は日本で古来、「百花の王」「群芳の貴種」とされ、もっとも高貴であるとされた花です。ちなみに中国では牡丹がもっとも高貴な花とされています。上記のように菊の花は、天皇の色である「黄色」が幾重にも重なっていること、そして、菊の花の形が太陽の形、日輪を示しているということから、天照大御神の「御姿」を現しているというように考えられたため、古くから天照大御神、そしてその子孫である天皇皇室を表す象徴の花とされたのです。また、太陽と同じで、さまざまな病気を治すということ、要するに、邪気を払い悪を退散させるという意味で、神に通じるというような思想も、菊の花が薬として伝わってきたことに関係があるのかもしれませんが。

いずれにせよ、天皇家の花として、伝来以来、菊の花は天皇家の象徴の花とされていたのです。しかし、それら風流が最も盛んだった時期に、菊の紋章が使われたのではありませんでした。実は、平安時代は、天皇は「菊の紋章」などを使わなくても、その車列などを見て天皇の行幸であるということがすぐにわかったので、そのような紋章は必要なかったのです。そこで、定型の紋章はあまり使わず、菊の文様を牛車や持ち物に施していたようです。奈良時代のお寺などに、菊の模様をあしらったものは少なくないのに、菊の紋章のものが少ないのは、そのような意味です。

皇室で初めて菊の紋が使用されたのは後鳥羽上皇の御代で上皇は個人的に菊を好まれ刀や輿車・御服などに菊紋をつけましたが、それが代々天皇家にて受け継がれていき、いつしか皇室の御紋章となったのです。

現在、皇室の正式な菊紋は 16 弁です。当然に、無断で 16 弁の菊の模様を使うと、すぐに注意され罰せられることもあります。他にも菊の紋を使うところは少なくありません。しかし、花びらの数が違ったり、菊のほか何か別なものをあしらうなどして、天皇の紋とは異なるように工夫されています。また、旗等も、天皇陛下・皇后陛下・皇太子殿下・皇太子妃殿下・そのほかの宮家殿下と、旗の形や大きさなどが異なり、その旗の形と大きさで、すぐに分かるように工夫されています。

しかし明治神宮創建（大正 9 年 11 月 1 日）当時、この皇室の 16 弁の菊紋使用については、まだ規則がなかったので、明治神宮の建造物には菊紋がたくさん使われています。しかし、これを記念品・印刷物などに使うことはなかったそうです。さすがに不敬という概念が強かったのでしょうね。同じ時期に作られた現在の国会議事堂も、3 階にある天皇陛下

の部屋は、菊の紋がさまざまなところに作られています。あまり小学校の社会科見学では説明されませんが、ドアノブやドアの蝶番も、全て純金に菊の紋が入っているのです。しかし、明確な規定がないので16弁菊ではなかったり、形が少し異なったりしているものもあります。

いずれにせよ、「菊」がめでたい花であり、そして、そのもっとも高貴な花が、日本のもっとも高貴な存在の紋章に使われている。そしてその先祖である天照大御神の形に似ていて、人々の病気を癒し、そして長寿を祝う花になっているということ。そして、その花が「重陽」の祝い日に「陰払い」として使われているということ。これらは全て関連性があり、そして、日本人の心を表しているのではないのでしょうか。